

# 宿尻遺跡

県営ほ場整備事業西部地区に  
伴う緊急範囲確認調査報告書

1994. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が宿尻遺跡

## 序

八ヶ岳山麓の原村では、農業の合理化と生産性の向上を目的とした県営ほ場整備事業が進められており、村内の柏木・菖蒲沢地区に係る「県営ほ場整備事業西部地区」も平成6年度の工事着工が計画されているところであります。

一方、八ヶ岳西麓に広がる帶状の台地は遺跡の宝庫として全国的にも著名であり、古くから注目を集めてきました。このたび報告書を刊行することになりました宿尻遺跡は、周知の遺跡ですが、水田であるために表面採集調査ができずそのひろがりや性格が明確ではありませんでした。そこで今回、諏訪地方事務所の委託を受けて、原村教育委員会が遺跡の範囲と内容を把握するための範囲確認調査を実施したものです。

今回の調査にあたり、ご理解とご協力をいただいた諏訪地方事務所土地改良課各位、菖蒲沢地区及び柏木地区実行委員会各位、地元の地権者の方々、また長野県教育委員会をはじめとして、発掘調査から報告書作成にいたる過程で、御指導、御協力を賜った関係者各位に心から謝意を表し、序といたします。

平成6年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

## 例　　言

- 1 本書は、「県営ほ場整備事業西部地区」に伴って実施した長野県諏訪郡原村菖蒲沢に所在する宿尻遺跡の範囲確認調査報告書である。
- 2 本調査は、諏訪地方事務所の委託を受けた原村教育委員会が、国庫及び県費から発掘調査費補助金の交付を受けて、平成5年11月18日から12月6日まで実施した。整理作業は平成5年12月7日から平成6年3月22日まで行った。
- 3 現場の発掘調査における遺構等の実測・記録は五味一郎と井上智恵子、写真撮影は五味が行った。また遺物整理・図面の整理は五味・井上、原稿の執筆は五味・井上が話し合いのもとに行った。
- 4 出土品・諸記録は原村教育委員会で保管している。なお、本調査関係の資料には、46の原村遺跡番号を表記した。
- 5 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、長野県教育委員会文化課指導主事小平和夫・小池幸夫・春日雅博の各氏、武藤雄六氏、茅野市教育委員会の小林深志氏、地権者の宮坂一次氏に御指導・御教示を賜わった。記して厚く感謝申し上げる。

## 目　　次

### 序　例　言　目　次

I 調査に至る経過	1
II 発掘調査の経過	3
III 遺跡の位置と環境	3
IV グリッドの設定と調査の方法	6
V 遺跡の層序	7
VI 遺構と遺物	7
VII まとめ	10
参考文献・発掘調査団名簿	

## I 調査に至る経過

宿尻遺跡の保護については、平成5年10月4日に行われた県営ほ場整備事業西部地区にかかる遺跡の保護協議において協議された。出席者は長野県教育委員会文化課・諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・原村教育委員会の4者である。平成4年度の保護協議では、柏木区に所在する比丘尼原遺跡の試掘調査を行う計画であったが、平成6年度のほ場整備事業の着工が菖蒲沢地区に変更されたため、急きょ予算を宿尻遺跡に振り替え、範囲確認調査を実施することとなった。

本遺跡は、昭和51年に地主の宮坂一次氏が2枚の水田（原村10,165番地）を1枚にするための造成工事を行った際、縄文時代中期の九兵衛尾根式と曾利式土器の破片を発見している。その後も曾利式土器の破片・黒曜石・石皿の破片を採集しているが、付近はすべて水田であるため、遺跡の範囲や性格が不明なままであった。そこで範囲確認調査を行うことにより、遺跡の広がりや遺構遺物の埋蔵状態の確認・破壊状況等を把握し平成6年度の本調査に備えることとし、地元の



第1図 宿尻遺跡調査地区と調査風景（北から）

表1 宿尻遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文		弥生					古墳					奈良		平安		中世		近世		備考
			草	早	前	中	後	晩	生	古	墳	良	安	世	昭和	50	51	52	53	54	55	56	
11	阿久		○	○	○	○	○					○											昭和50～53年度、平成5年度発掘調査
17	白ヶ原			○								○											昭和52年度発掘調査
19	南平			○																			
22	清水			○																			
42	居沢尾根			○								○											昭和50・51・52・56年度発掘調査
43	中阿久			○								○											昭和51年度発掘調査
44	原山			○								○											昭和50年一部破壊
45	広原日向	○		○	○							○											昭和58年度発掘調査
46	宿尻		○	○								○											平成5年度発掘調査(範囲確認)
47	ヲシキ		○	○	○							○											昭和51年度発掘調査
48	楓の木			○								○											昭和53年一部破壊
49	大石	○	○	○	○							○											昭和50年度、平成4年度発掘調査
50	山の神			○	○							○											昭和54年度発掘調査
51	姥ヶ原			○	○							○											昭和63年度、平成元年度発掘調査
52	水掛平				○							○											
53	雁頭沢				○							○											昭和54・57・63、平成4・5年度発掘調査
54	宮ノ下		○	○								○											昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根				○	○						○											
56	家前尾根				○							○											
57	久保尾根			○																			昭和51年一部破壊
																							昭和51年一部破壊



第2図 宿尻遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

は場整備実行委員会・地権者の理解と協力を得る中で11月18日から12月6日まで緊急に範囲確認調査を実施した。

## II 発掘調査の経過

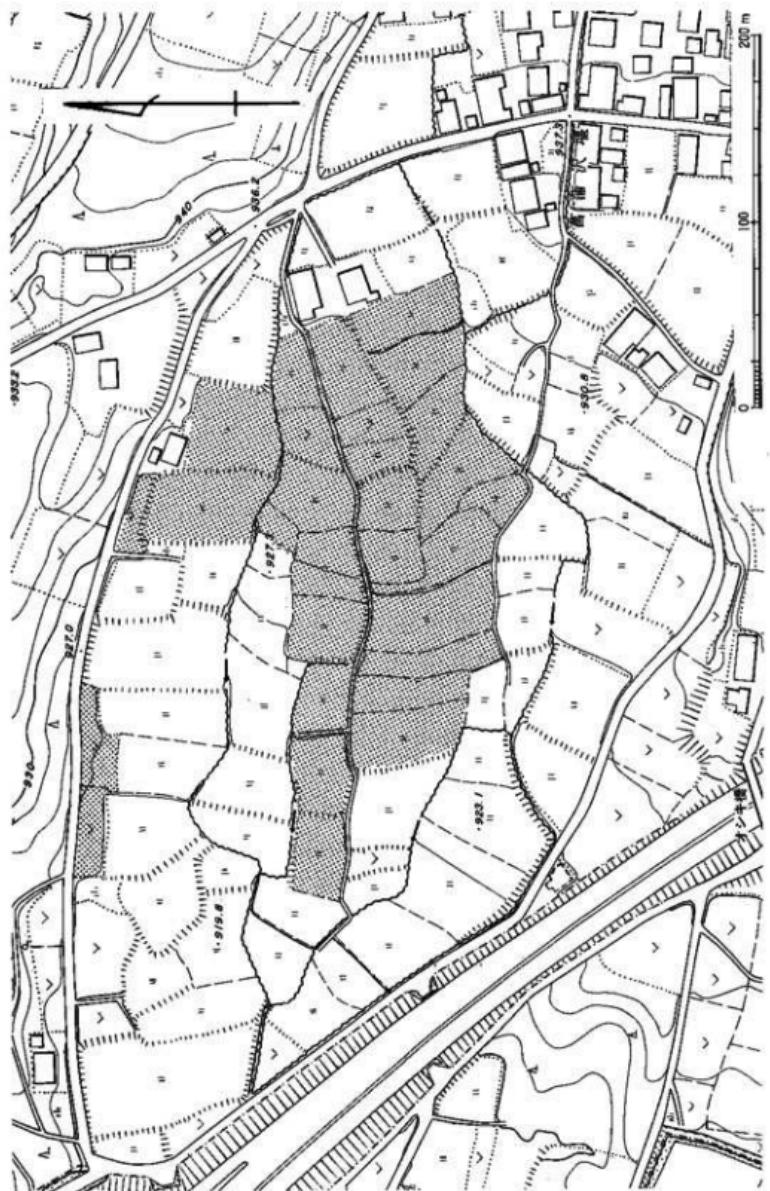
平成5年11月18日 発掘調査の準備を始める。

- 11月19日 基準杭及びグリッド杭の設定。調査予定地の面積が広くまた水田であるためグリッドを設定する位置が限られ、作業は難航する。
- 11月24日 19日同様、基準杭及びグリッド杭の設定を行い、明日からの作業に備えて、発掘機材の一部を搬入する。
- 11月25日 機材の搬入とテントの設営。重機によるAトレンチ調査開始。グリッド発掘調査開始。HC-91グリッドでは土師器・須恵器・灰釉陶器が出土し、焼土とピット状の小穴を検出する。住居址の可能性がある。HO-92からは小豎穴状の落ち込みを検出。
- 11月26日 Aトレンチ両側のグリッド調査。重機によるA・Bトレンチの調査。Aトレンチのジョレンがけ。グリッド設定。Aトレンチから縄文中期初頭と思われる小豎穴2基が検出される。また同時期の土器片の散布が確認される。
- 11月29日 重機によるB・C・Dトレンチの調査。Aトレンチのジョレンがけ。グリッド発掘。グリッド設定。
- 11月30日 重機によるD・Eトレンチの調査と遺構の検出されたAトレンチと付近のグリッドの埋め戻し。グリッド発掘とグリッド設定。
- 12月2日 グリッド発掘。Eトレンチの精査と検出された小豎穴の調査。杭抜き等片づけを始める。
- 12月3日 Eトレンチの小豎穴掘り下げ及び残りのグリッド調査を終了させ、発掘機材の片づけとテントの撤収を行う。
- 12月6日 各グリッドとEトレンチ小豎穴の記録を行い、調査を終了する。

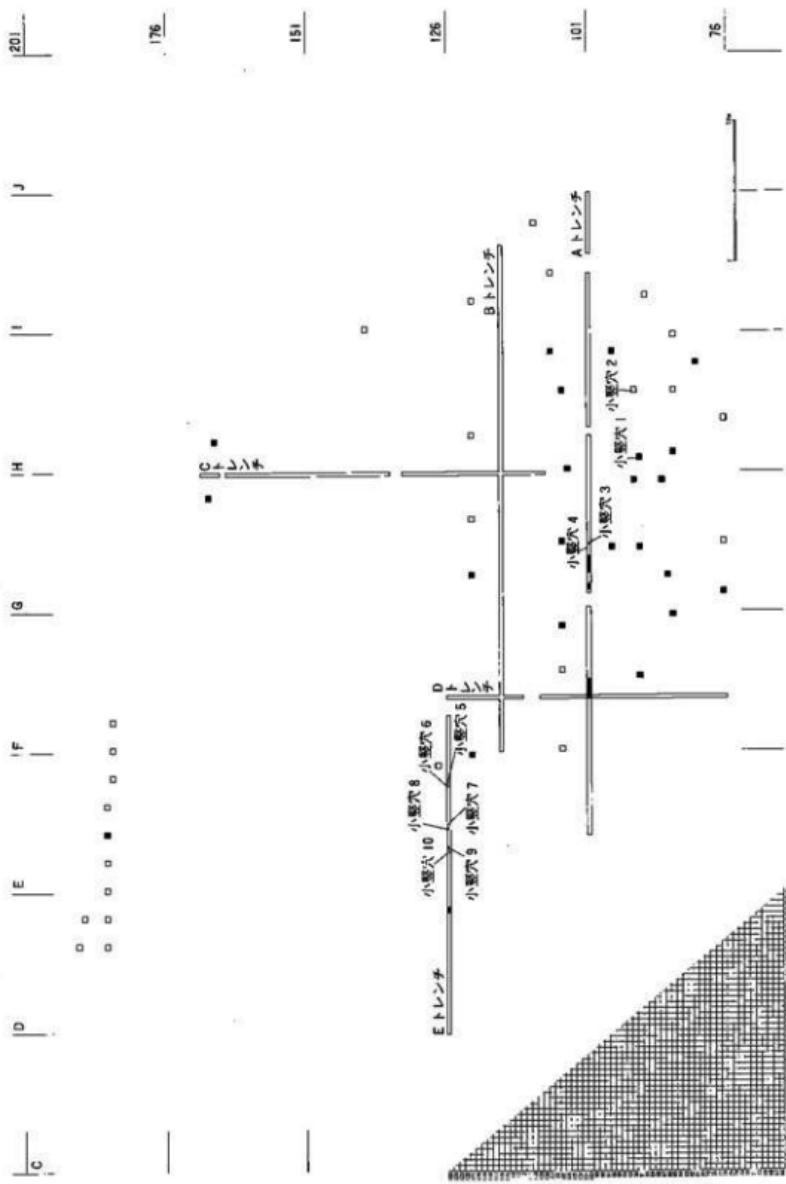
## III 遺跡の位置と環境

宿尻遺跡（原村遺跡番号46）は、長野県諏訪郡原村10,165番地付近にあり、菖蒲沢区の西に隣接する。標高は927m前後を測る。地目はほとんど水田であるが、一部普通畑がある。

遺跡の北と南には小高い尾根がある。北の尾根と南の尾根の間は広いところで約300mほどあ



第3図 宿戸遺跡発掘調査区域図・地形図(1:3,000)



第4図 稲尾遺跡グリッド・トレンチ配置図(1:2,000) (■は遺物出土グリッド)

り、西に傾斜するものかなり平坦で、その中には東西方向に2筋の沙が流れている（1本は菖蒲沢沙の続き）。遺跡地はこの2本の沙に挟まれた微妙な隆起部にあたるが、田の造成で平坦面が作られているため明瞭ではない。

## IV グリッドの設定と調査の方法

調査にあたり、まず遺跡の中心部と推定される宮板一次氏の田に最初の基準杭を置き、東西南北方向（磁北による）に十文字のラインを設定した。東西方向はこの基準線からそれぞれ50mの大区分を設け、西をG区、東をH区とした。さらにその大区分の中を2mの小区分に分け、北からアルファベットのAからY（50区分）までを振った。南北方向は大区分を設けず、東西の基準線を境に2mの小区分に区切り、南に100・99・98と小さく、北に101・102・103と大きくなるよう名付けた。これによって遺跡全体に2m×2mのグリッドが設定されたことになり、各グリッドは①東西の大区分、②東西の小区分、③南北の小区分の順に表記することで特定した。（例：HA-104）また、東西のグリッド列については「100列」のように、東西の列については「GY列」というように称している。東西方向のラインは、ほぼ八ヶ岳裾野の傾斜方向である。

調査は、対象範囲が広いため、手堀りによるグリッド発掘と重機によるトレンチ発掘を併用した。グリッド発掘を行うにあたっては、水田が作られた際山手側を削って下方へ盛らしてあるため、田の形を見ながらできるだけその中央付近を選んで任意に行った。また、トレンチ発掘の様子を見ながら遺跡中心部と推定される箇所から周囲に広がるように調査し、用地北端の尾根南斜面の畑地も調査した。トレンチ発掘はグリッド列に沿うように、ほぼ重機のパケット幅（1.2～1.6m幅）で、東西に3本（A・B・Eトレンチ）、南北に2本（C・Dトレンチ）を掘り下げた。

いずれも基本的にはソフトローム層上面までの調査とし、トレンチ発掘では遺物の分布のあった時点また遺構の確認された段階で調査を止め、手堀りで確認を行った。今回は範囲確認調査であるため、明らかな遺構は基本的に調査しなかったが、Eトレンチの小豎穴については遺構かどうかの判断ができなかつたため一部を掘り下げた。

調査面積はグリッド発掘が50グリッド200m<sup>2</sup>、トレンチ発掘が約968m<sup>2</sup>の計1,168m<sup>2</sup>である。

## V 遺跡の層序

本遺跡の層序は、地点により異なっている。ここでは遺跡中心部の尾根筋で本来の堆積が残っているグリッドの基本的な層序を示す。

- 第I層 黒色 土層 水田の耕作土層。粘性強くしまっている。層さ25cm。
- 第II層 赤褐色土層 水田の床土。硬度高く良くしまっている。粘性なし。厚さ5~11cm。
- 第III層 黒褐色土層 水田造成前の表土層（耕作土層）と思われる土層で、しまり粘性ともに無く、ぼろぼろしている。ローム粒、細礫を含む。大きな礫を含むことがある一方、この層が認められないグリッドもある。厚さ20cm。
- 第IV層 茶褐色土層 しまり粘性ともにあり、やや固い。第V層へ漸移する。第III層同様、大きな礫を含むことがある一方、この層が認められないグリッドもある。厚さ15~30cm。
- 第V層 黄褐色土層 いわゆるソフトローム層。

## VI 遺構と遺物

### 1. 遺構

小豊穴を10基確認し、そのうちの小豊穴5~10まで6基を調査した。

調査した6基の小豊穴は遺物の出土もほとんどなく、いずれの時代の遺構と断定すべきか困難であった。

小豊穴1 一応小豊穴としたが、径45cmのピット状の小穴である。埋土は黒褐色土。HC-91グリッドで検出した。すぐ脇から焼土が検出されている。このグリッドからは須恵器、土師器の接合資料が出土していることもあり住居址の可能性があるが、グリッドを拡張して確認することができなかった。

小豊穴2 HO-92グリッド北壁下に一部が検出された。東西径120cmで遺物の出土はなく、時期は不明である。埋土は茶褐色土である。

小豊穴3（第10図） Aトレンチ内のGM-100グリッドで検出。径80cmで内部に縦文時代中期初頭の一括土器が横倒しの状態で入っている。埋土は茶褐色土で、ローム粒と炭粒を含む。

小豊穴4（第10図） 小豊穴3のすぐ脇のGL-100グリッドで一部が検出された。遺物の出土はないが、埋土が類似するため、小豊穴3と同様の時期のものと思われる。

小豊穴5（一部調査） 東西60cm、深さは18cmと浅いが、小穴が3箇所内部に認められる。埋土は茶褐色土で自然堆積状態であった。底面は黄褐色ハードローム層。

小豊穴6（一部調査） 東西90cm、深さ22cmで、ひとつの小豊穴ととらえたが、西側はもう一つの穴と切り合い状態を示しこちらは深さ30cm。埋土は小豊穴5同様茶褐色土で自然堆積状態。底面は黄褐色ハードローム層と茶灰色粘土化ローム層。

小豊穴7（一部調査、第11図） 東西65cm、深さ18cm。埋土は茶褐色土。底面は茶灰色粘土層。

小豎穴8（一部調査、第11図） 東西110cm、深さ16cm。埋土は小豎穴5・6に似た茶褐色土。5mm程度のローム粒を含む。底面は茶灰色粘土層。

小豎穴9（一部調査、第12図） 東西120cm、深さ25cm。不定形な穴で、埋土は小豎穴7に類似する茶褐色土で茶灰色粘土ブロックが混入する。底面は茶灰色粘土層。

小豎穴10（一部調査、第12図） 東西140cm、深さ29cm。南北に帶状に続く。埋土は小豎穴5・6に似た茶褐色土。下部にロームの柔らかいブロックを混入する。埋土中から微細な縄文土器？破片と黒曜石碎片が出土した。底面は茶灰色粘土層。

## 2. 遺 物

### (1) 遺物の分布範囲

発見された遺物は総数254点で、内訳は縄文時代の土器片113点、土師器破片32点、須恵器破片10点、灰釉陶器破片2点、近世陶器？破片1点、石器（剣片・碎片を含む）96点、であった。遺物の出土のあったのは、グリッドにして32（トレンチ出土遺物もグリッドで取り上げてある）箇所である。そのうち縄文時代と思われる遺物は16箇所、平安時代の遺物は7箇所から出土している。そのほとんどは調査対象区の中心を東西に走る農道の南側（85列～105列）であり、遺物の広がりは南北60m×東西150mと当初の遺跡推定範囲と一致してきている（第6図）。この農道の北側については、現地形とCトレンチの状態から見てなだらかな傾斜の谷部となり、遺物の出土もほとんどない。Cトレンチの130列～153列ではロームが粘土化しており、調査後すぐに水が湧き出して水たまりとなる状態であった。

また北側の尾根斜面の畑からは縄文時代と思われる土器片をわずかに発見したものの、土層には大小の礫を大量に含み、調査グリッドの状況からは遺構等の埋没が予想される状態ではなかった。一方、EトレンチD・E区付近については、付近をグリッド調査できなかつたこともあって、小豎穴5～10を検出したもののほとんど遺物を発見できなかつた。ここが現地形で小高い尾根状となっていることもあり、小豎穴の性格も含め今後の調査に課題を残したものといえる。

### (2) 遺 物

出土遺物は、縄文時代早期・中期、平安時代、近世？に帰属するものである。

#### ① 縄 文 時 代

##### 土 器 器（第5図）

土器破片の内訳は早期6点・中期93点（内中期初頭期49点）・その他14点である。

縄文時代早期の土器片（1・2）は、胎土に植物纖維を含み器面は外面あるいは内外面ともに条痕を施している。すべてGX-87グリッドから出土。

縄文時代中期初頭の土器片は、そのほとんどがAトレンチのFK・FL区の比較的狭い範囲か

ら出土している。ここでは遺構に伴うものかは確認できなかった。破片は地文に繩文を用いるもの（5）と半割竹管などの沈線文を施したもの（3・4）の2種類に大きく分けることができる。前者は結節繩文を伴い、張り出し底を特徴とする。三角印刻文を施した口縁部破片もある。後者は地文となる格子目状の沈線や細線文を半割竹管で幾何学的に区画するものである。連続爪形文の施された破片もある。また小豎穴3で検出された一括土器は調査していないのではっきりとは言えないが、破片から見て底部の張り出したこの時期の深鉢形土器である。その他、繩文時代中期と思われる土器片があるが、細破片で時期ははっきりしない。

#### 石 器（第5図）

内訳は石鎌3点・石匙2点・石錐1点・スクレイバー1点・打製石斧6点・横刃形石器1点・凹石3点・使用痕ある剝片1点・剝片と碎片77点・不明1点である。

6・7は石鎌。両方とも黒曜石製で7は両面に大きな剥離面を残す整形途中の失敗品あるいは未製品と思われる。HA-104とGL-96グリッドから出土。8はチャート製の石錐。断面は三角形で二次調整はごくわずかしか加えられていない。先端部は欠損している。HV-96グリッドから出土した。9はHV-96グリッドから出土したホルンフェルス製の石匙。小形の精製品である。刃部には表裏両面から調整が加えられている。10は打製石斧。小さくて薄い作りである。左右の刃に浅いえぐりが認められる。11は横刃形石器である。刃部はかなり鋭く、細かい調整を加えている。打製石斧・横刃形石器とともにGL-96グリッドから出土し、頁岩製である。

#### ② 平 安 時 代

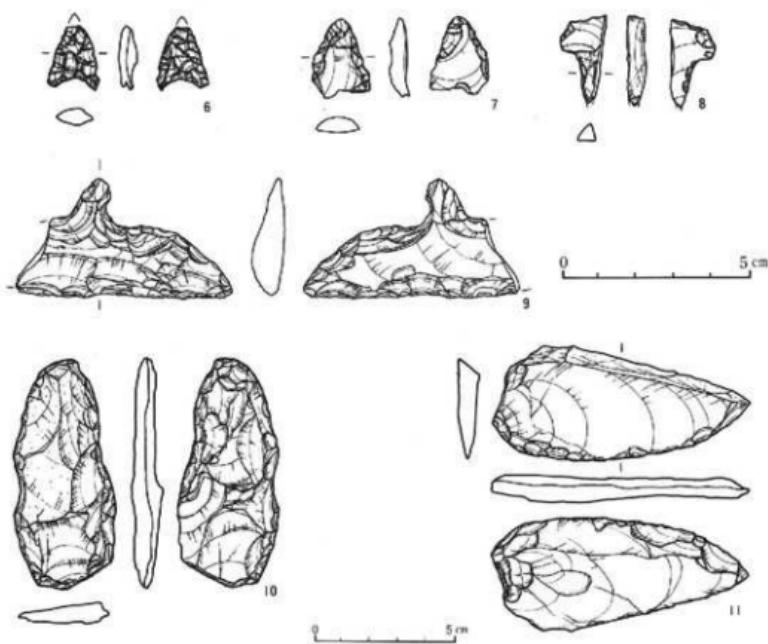
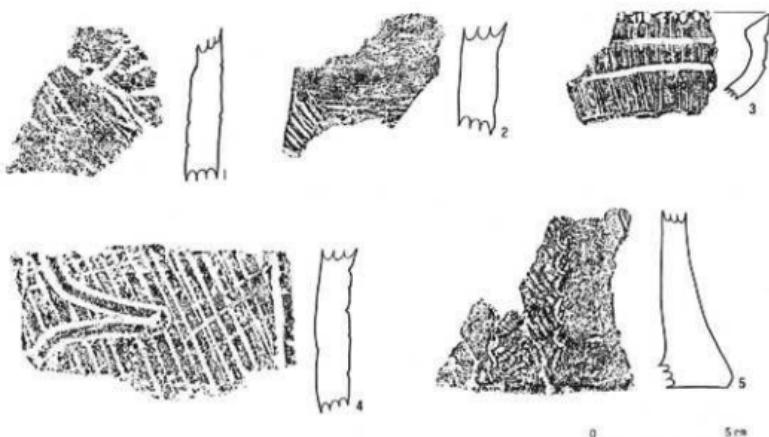
##### 土 器

土師器・須恵器・灰釉陶器がある。土師器は壺と、壺と思われる小片。壺は裏表に刷毛目整形が見られる。GX-92グリッドからはまとまって出土した。須恵器は壺の破片が3点ある。灰釉陶器は小破片のため器形の復元はできない。

#### ③ 近 世

##### 土 器

高台付の陶器破片が1点ある。胎土は一見して灰釉陶器に似るが江戸時代の陶器と思われる。高台はひねった粘土を単純に押しつけている。GX-87グリッド出土。



第5図 繩文時代の土器拓影と石器実測図（1～5・10・11は1：2、6～9は2：3）

## VII ま と め

今回の調査は、広大なほ場整備対象地区の中で、当初遺跡と推定されてきた箇所を中心に、今まで明確でなかった遺跡の広がりや遺物の埋蔵状態・破壊状況等について探るための範囲確認調査であった。限られた期間の中で行った調査であり、グリッド発掘もかなり任意に行っているため十分な成果を上げたとは言いがたい面もあるが、一定程度の知見を得ることができた。

しかし遺構については、小堅穴を検出したものの住居址をはっきりととらえることができず、集落跡の存在を明確にするまでには至らなかった。だが、小規模ではあっても集落の埋没は十分予想されるところである。また、トレンチ発掘の結果から見る限りでは、水田の造成による破壊も大きな田以外はそれほど顕著ではなく、原地形の変造は予想していたほどではなかった。

本遺跡の時期については、採集遺物によって縄文中期初頭及び同曾利期と考えられてきたが、新たに縄文時代早期と平安時代が加わった一方で、曾利期の遺物は発見できなかった。「遺物の分布範囲」の項で述べた E トレンチの D・E 区周辺の問題は残るもの、遺跡は從来考えられていた位置と範囲を大きくはずれるものではないようである。

なお、平成 6 年度には本調査を控えているため、遺構遺物の説明は概略にとどめることとした。その中で遺跡の詳細が明らかにされていくものと思われる。

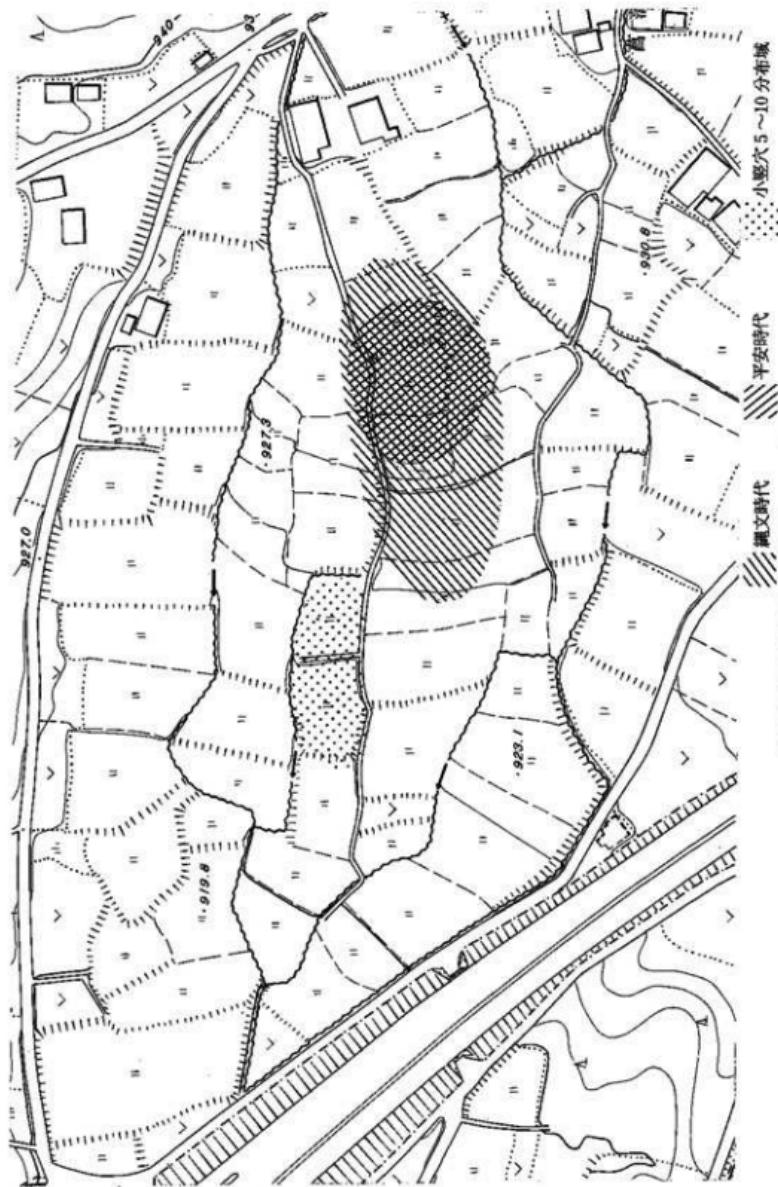
最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

小野穴5～10分布域

平安時代

鎌文時代

第6図 宿原遺跡範囲の概念図 (1:2,500)





第7図 発掘調査風景



第8図 Aトレンチ（西から）  
(ピンボールは小堅穴  
3検出地点)



第9図 Dトレンチ（西から）



第10図 上 小豈穴3、  
下左 小豈穴4  
(Aトレンチ内 西か  
ら)



第11図 右 小豈穴7、  
左 小豈穴8  
(Eトレンチ内 南西  
から)



第12図 上 小豈穴9、  
下 小豈穴10  
(Eトレンチ内 西か  
ら)

## 参考文献

1985.07 原村役場「原村誌 上巻」

1988.03 長野県史刊行会「長野県史 考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物」

## 発掘調査団名簿

团长 平林 太尾(原村教育委員会教育長)

調査担当者 五味 一郎(原村教育委員会)

調査員 井上智恵子

調査参加者 小池 芳久 錦倉きふみ 宮坂とし子 藤原智恵子 清水つるゑ  
清水 正進 清水 太助 清水としみ 小林 ミサ 中村きみゑ  
清水 豊一 小林 静子 小林 正一 清水 けさ (順不同)

事務局 平林今朝二(教育次長) 大口美代子(庶務係長) 宮坂 道彦  
伊藤 佳江 平出 一治 平林とし美 五味 一郎

## 原村の埋蔵文化財25

### 宿尻遺跡

県営ほ場整備事業西部地区に  
伴う緊急範囲確認調査報告書

発行日 平成6年3月22日

発行 原村教育委員会  
長野県飯島郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社  
塩尻市北小野 4724  
TEL 0263-56-2111

